

V 座談会

座談会「25年を振り返って」

対談者 小島 弘道・堀内 孜・西 穰司・小松 郁夫・大西 信行・天笠 茂

発足時のエピソード

天笠 これからお話ししていただきたいのですが、1つには、発足時の事情についてお願いします。粋みたいなものでしょうか、そのあたりのことを残しておく、ということが本企画のねらいの一つであります。これが一つの柱になると思います。それから、その後の25年間の歩みとでもいいましょうか。これをどういうふうの評価していくのか。われわれとしての自己評価、自己点検とでもいいましょうか。そういうのがあると思います。それから、もう1つの柱は、これから将来的にどうしていくべきなのか、というのがあります。そういった意味では、時間軸として、「発足時」、「それからの25年」、そして「これから」、という立て方があるのではないかと思います。

堀内 ただ、まあ、今になってちょっと手後れですが、今回ここには、だいたい同世代が集まってしまっているじゃないですか。中堅どころというか、木岡君の世代とかいたら、だいぶわれわれと見方が違ってくるんだらうけども。まあ、加藤君に加わってもらって、若手代表（笑）。ところで、いま、紀要が25巻なんだよね。まあ、確認のつもりで言うと、大塚発足から25周年。

天笠 今度の大塚の紀要が25巻目ということになるのですが、第一巻はどのように誕生したのでしょうか。発刊の前に、少し活動があつての、第1巻ということでしょうか。

堀内 大塚の名前を作ったのは1巻のときですからねえ。だから、その意味では25年でいいと思いますね。

天笠 では、いきさつあたりからまずお願いします。

堀内 始めから話していくと、まず、東京教育の時の吉本研究室の1つのヒストリーになってくると思うんだけど、僕と西君がマスターに入った時、1番最初、4月なんだけれども、その前の3月、ちょっと日までは覚えてませんが、あの厚木温泉、飯山観音か。

西 昭和47年かな。

小松 昭和46年じゃないですか。

堀内 昭和46年の3月かな。あのときは名前はなかったんじゃないかな。

西 あのときは、たぶんね、学校組織研究会という名前があった。

堀内 ただあれはもっと大きな組織じゃないの？

西 僕の卒論に学校組織研究会の論文の一部を引用しているので先だと思います。

堀内 いや、あの集まりではなくて、もっと大きな粋の名前じゃでなかった？学校組織研究会というの？。

西 いや、それ以外にはないと思います。吉本シューレの、吉本先生の研究室の研究団体の組織は他にはなかったと思う。

堀内 その、飯山観音の時の顔ぶれは今でも覚えているんだけど、…。まず、吉本先生、永岡先生。

西 渡辺さん、伊藤さん。

堀内 朴さん、小島さん、丸山さん、あとわれわれ。

西 上條さん、小島さんと、たぶん同級生の社会教育科にいた人。

堀内 その人は、いなかったと思うよ。

西 渡辺さんはいらしてた。

堀内 昼から2時間位かな。5時くらいまでなんやかやと、雑談ばい研究会をやって、それから飲み会というふうになって、というのがわれわれの記憶している最初なんだよね。まあ、そのときは、今言ったように、西君がいった名前かもしれませんが、僕は会の名前も覚えていない位で。まあ、年に1回位こんなことをやっていると記憶しています。それで、紀要をつくり始めようとした頃というのは、まあ西君もよく記憶してると思うんだけど、吉本先生が言われたことには、沖縄の返還の直前で、沖縄の教育行政資料を文部省の補助金でいきましょうと、確か50万取ったというので計画をたてたんですね。要するに、教育委員会制度が本土と違うことをやっているのが本土並みになってしまうので調べましょうと。それで、僕と西君に行けたら行けって話になったんですけども。僕はちょっと行けなかったんですけど。

西 私が行ったのは昭和47年。

堀内 そうするとM1だけ？

小松 M2だね。私がM1だから。

西 あの時は、僕しか行かなかった、学生は。

天笠 沖縄の返還は47年5月です。

堀内 じゃあ、昭和46年？。46年ね。そのとき、写真等をいろいろと複写をして持ってきたのね。それで写真のDPEを出したんですよ。ところがそれを出したところの店に、みんなパーにされて、向こうのミスで。それで保障問題で、すったもんだして。何か規約みたいなので、フィルム代しかかっていうから、そんなバカな話しは無いてって言って怒ってね。その時に保証金を取って。最低一人もう一回行って資料を取って来れるように渡航費を出せといたんです。額で、17、8万。その時の10数万が残ったんだけど。もう一回行くという話もなく。結局、そのお金を使って紀要を出しましょうというのがその翌年なんですね。それで、紀要を出すからにはどういう形にするかという話になって。当時、筑波に移転の話がずうとあって。大塚の今の名前は、みんなでわいわい言っているうちに出了名前ではあるのだけれども。大塚史学会が、和歌森太郎先生がやっていたものがありましたでしょう。そういうのが1つイメージにありまして、筑波にいても残るような名前にしよう。東京教育大、何何研究室ではだめ。またすぐに名称を変えなきゃいけないということが

あって。大塚の名前を使おうと。それで大塚学校経営研究会という名前で第1巻を編纂したのですね。その時は、オープニングのレビューになるからということで、吉本先生の研究室に所属した人の全員に書いてもらおうと、例えば高野尚好先生とかね。声をかけて書いてもらったと思うんですよ。で、一応まあ、吉本先生の研究室の全員に参加してもらおうと。そういうかたちでスタートしたのがその年、翌年だと思います。

小松 それにしても17、8万ってすごいですよね。昭和46年の時には、初任給は4万2千円だったんです。僕、大卒で。

堀内 結構お金かかりましたね。

天笠 資料は全くないということですか、沖縄の。

堀内 写真資料だから、ファイルしたわけ。実物を持ってきたわけではないから。

天笠 筑波大学の研究室のどこかにあるんじゃないの。それとも完全に移転のときに消えたか。

西 文書資料は多少残っているかもしれない。古い資料を僕は結局、そのとき、カメラを買ってもらったんだけど、それで撮って。困りましたよ。こんなんでは全然レポートなんて書けやしませんよって。確か、永岡先生は、そのできごとについて強い憤りを覚えられて。弁護士を立ててもね、学術資料というのはそんな甘いものではない、というぐらいに、そうでしたよね。

堀内 写真屋最初ね、ビールぶら下げてきてね、、、それを突っ返して、、、(笑)。まあ、創立はそういうエピソード絡みであったんですよ。さっき言った飯山温泉のが、われわれがマスターに入ってから夏ですか。夏の合宿という形で始まった。翌年からだっけなあ、夏合宿始めたのは。

天笠 『学校運営研究』で連載されていましたよね。学校組織研究会か何かの名前で。

堀内 あれよりも前。

天笠 その前ですか。

堀内 なんかいろんな人が入っていたでしょう。研究室以外の人かね。

西 夏も。最初3回やってたのかな。

天笠 私がマスターに入った最初の年は、年に3回ありましたよ。

西 名古屋の時の合宿から定期的にあつたよ。

堀内 夏、沖縄に行っている年は合宿は無かったんじゃないかなあ。

西 その年はなかったでしょ。

堀内 だから2人研究室に入ってからじゃない。

小松 昭和46年に2人入ったでしょ。47年も2人、48年も2人入ってきた。

合宿研究会と会の発展

堀内 ずっと、だから、5年間は2人ずつコンスタントに入ってきて、最後ちょうど10人になったんですよ。研究会合宿を始めたのは、多分、昭和47年からだと思います。1番最初どこでやったか覚えている？

大西 那須だと思う。卒論で何やったんだとかね、この研究室に入ったら酒飲めなきゃいけないとかね(笑)。

堀内 夏春の合宿研究会からスタートしたと思います。紀要との関係はあったでしょうね。1巻は特集でやったでしょ、指導行政で。比較だけ。

大西 あれは、私もうメモもないので記憶を辿っていたんですが、、、。そうしたら、指導行政という流れが一つあって、確か、千葉に1回行ってる。それから、福島の飯坂温泉にもいって、指導行政の現場を見に行ってる。そのこととも絡んで、科研費の申請もしていた。

堀内 あの時はもう村田君なんかもいた。2、3年経ってから、あるいはドクター入ってからだと思うね。で、指導行政についてだけど、正式なタイトルは忘れましたが、吉本さん代表で科研が通って。で、大原の統合地教委、それから二本松と福島に行ってる。福島は県の指導主事が市町村をまわって、各拠点ごとに教頭とか教務主任を集めて、いわゆる認定講習の県版をやってたね。それに立ち会うことで、われわれ参加して。それから埼玉の事務所の方に行ってる。われわれも指導行政、わからなくて、手さぐりみたいなかたちでやってたんですよ。その時は、吉本さんが指導行政を本に書くからということで。つまりそのときの研究のベースというのは指導行政というのが一つあったんですよ。

天笠 そういう点では1巻が出るまでに、活発な研究活動があって、それなりの人が入り、組織が次第にがっちりしたものになっていった。そういう過程の中で一つの集大成として第1巻が出たということでしょうか。

大西 それでね、第1巻の特集が「公教育の質的保障と指導行政」ってなっているでしょう。調査研究なんかして、教育学会に投稿をして、結果、それが掲載されなかったんですよ。それをどこかに残したいということがあったように思います。私の記憶では。

堀内 指導行政に関しては、院生だけで教育学会で発表をやった。

西 行政学会。

堀内 教育学会もやった。

西 そうそう。夏ね。中央大学で。

天笠 私が研究室に入った時は、もう、今のような話も既に前史としてありましたね。すでに組織ができあがっていました。

堀内 天笠君が入った時は今言った2人ずつの一番最後のときでしょう。

天笠 私は一人、、、。平沢さんは私より1年前です。

堀内 僕、西君でしょう。小松、大西でしょう。で、その下が、村田、黒澤、平沢、大脇。

天笠 そして私ですから。

堀内 あれ?一人だけ。なんか10人で完成していたような気がしてたんだけど(笑)。

天笠 その後しばらく空いて、篠原君が入ってきました。

小松 堀内君の前に朴さんがいたんですよ。

堀内 朴、安井、小島、高野（尚）、...

天笠 その第一巻に掲載した研究会の名簿が象徴的なんですよ。今お話のように。入室順になっていて。そのうち、あいうえお順になるんですが、...

堀内 その頃、結構、研究生の先生がいたんですよ。

天笠 そうですね。私のときは新潟から勝山さんがいました。

堀内 墨田の酒井さんとか。

西 その前に和泉先生とか。鳥取の竹内さん。女性の。

堀内 彼女は最初の、吉本研究室の女性メンバー。

天笠 現職の先生が入ってくるというのが特徴でしたよね。

研究会運営と紀要の発刊

天笠 あと、創成期で付け加えることや、何かエピソードありますか。

小松 いやあ、これ、2号に研究会の会則が出ているんですけどね。1号には出ていないんだけど。2号には研究会の会則が出ていて...。会費がね、院生でね、月1000円、年間1万2千円って、結構高かったらうなあ、と思うんですけどね。

大西 まあ、前史的なところで結構貯えがあったと思いますけれども、とにかく、大塚の紀要を出すにあたって、吉本先生が3号雑誌にだけはするなよって、何回もいわれましたよ。ですからね、いま、お金の話が出たけど、ある程度、会費によって運営しているという原則があったような気がするんですよ。

天笠 何か、記憶に残っているのは、しょっちゅう、お金の話をしてるんですよ（笑）。

堀内 途中2万円になったでしょ（笑）。われわれは始めから関わっているから何とも思わなかったんだけど。途中から入ってきた人が、年会費2万円なんてとんでもないという話で（笑）。

天笠 とにかく、自分たちで紀要の印刷費を出すということ。会費納入といってもほとんどが印刷費になりましたね。それは今でも伝統なのかもしれませんけどね。

大西 あとは、話しとしては、文献目録がありましたね。いまとは違ってデータベースなんて、そういうものではなくて、名刺用紙に書いて手作業だったけども。ああいったところで出版されたときの、お金みたいなのはプールされていったんではないでしょうかね。

小松 連載の原稿料なんかも、そう。

西 雑誌の原稿料についてはプールしていったと思う。それで、この学校経営研究会の紀要を毎回出せるようにということで。会費だけでは危ないから。きちっと先の見通しをつけるということだったと思います。

小松 そういう意味で自分達でお金を出して、自分達の紀要を出そうというのは、いい精神だったと思うけどね。

堀内 どこまでを創成期とっていいのかわからないけれども、あの頃は背景的に筑波移転問題が

あって。吉本さんが学部長を2期されて、退官される時までだから、僕がドクター入ったときからたぶん学部長をなさっていた。それで天笠君が入ったちょうど最後、僕にとって最後だけれど、永岡さん在研でいらしたでしょ。そのとき結構ガタガタしてたのは確かなんですよ。そうしたことが背景にあったが故にね、われわれが何か拠り所というんで、研究会を、という意識が相当強かったような気がしますね。そういう背景が無ければね、他の大学というか、他の研究室と同じように、、、まあ、吉本語録みたいになっちゃうんだけれども、3号雑誌の話じゃないけれども、つねにまあ、彼の場合にはメインとサブという研究テーマがあって、そのまあ、サブにあたるんだけれども、われわれにとってはね。ということで共同研究を継続的にやられたのは一つの特徴だったと思います。小松 そういう面で、後から考えると、共同研究は、その時は、なんでこんなことをやるんだと思ったけど。関心も無い、、、いや、無いわけではないけど、、。だけど、後から考えると、なんかすごい気がするよね。

堀内 事務的なことも含めてね。

西 やっぱりね、基本的に社会科学領域の研究なんかは、当然、若いうちに経験しておかなくてはダメですよ。そうでないと、狭くなってね。僕はもう一つはね、特に堀内君はこれを出すときに、意識的にいろいろ提案してくれて、これが、教育大の教育学の関係でおそらく最初の研究誌だった、、、。

堀内 制度研究室の雑誌があった。

西 そう、制度研究があったけれども、そのあと続いて、人文学科教育とか、西洋教育史、外国教育史も号数が続いているとしても、まあ、制度研究を除いては、新しかったのではないかとということで。ただそれが、意識的には、制度研究室の、当時の先生方にとっては、新興学校経営学はなんだと。吉本先生はいいとしても、あの堀内や西は、若いのはだんだん生意気になって。そういう空気を感しましたね。あの時は、伊藤先生も体調を壊しておられて。

天笠 1巻を作った当時の人達は、大体、みなさん20代ですよ。30代以降はいなかったですね。

堀内 吉本研究室は、高野（尚）さんが最初なんだけれども。それから小島さんはすぐに神戸に出られて、安井さんも助手になって。大塚は、良かれ悪しかれ僕と西君から今のよう形になってきたといえるだろうと思うんですね。われわれがドクターの3年になった時には、10人のスタッフで、良かれ悪しかれ女性はいない研究室で、他の研究室から見ると一番アクティブな状況にあったと思うんですね。

天笠 第1巻編集を担当されたのは、堀内さんですよ。第1巻誕生にあたって、改めて苦労話がありましたらお願いします。

堀内 いろんなアスペクトがあってね。ひとつはお金の問題。2巻目をどうするかっていうことも書いたんですけど。それがスタート。それからやっぱり、中身の問題。僕と西君と、あとこの4人なんですけどね、マスターの2年でしょ。で、結局ねえ、みなさんもそうだと思うんだけれども、学校経営というのがあまり分らないできた。まあ、みなさんそうじゃないのかもしれないけれども

(笑)。天笠君は現職経験があるから自分なりの判断で入ったと思うんだけど。少なくとも僕は個人的な関係だけで来たみたいなのがあった。西君ともいつも言っていたのだけれども、永岡先生のゼミでアメリカの学校経営の本を読まされて、概念からわからないというようなレベルで。吉本さんも忙しかったし。でも今思うとすごいと思うの吉本さんは、あれだけ多忙を極めていても木曜日の週一回の研究会は最後までつきあってくれた。苦労話は、中身の問題ですよ。テーマをどうつめていくのか。最大公約数で、科研の話が指導行政という形になって。実際、指導行政というのが分からないでやってんですね。まあ今から思えば、赤面の至りで、書きっぱなしになったんだけど。

天笠 第1巻をつくるにあたって、吉本先生と永岡先生との関わりはどうだったのですか。

堀内 あまり絡まなかったというか、むしろわれわれサイドでやった。

天笠 むしろ20代の院生が、わあと作ったということですか。

堀内 先生方には御興に乗かってもらったという感じだろうね。

天笠 吉本先生、永岡先生に作れといわれたわけではないということですか。

大西 それはない。さっきも言ったように3号雑誌にはするなということはいわれたけれども。

堀内 僕は、編集担当者としては、本当に原稿を出してくれるかどうか心配だった。1巻だからオールスタッフでないという意味がないということだったから。

大塚の「組織」と「共同研究」の役割

天笠 では次に、その後の25年といえますか。他に区分ができるかも知れませんが、あえて25年間をひとまとめにしてですね、この間の歩みをどう見ていったらいいのか。そういったことについてお話いただければと思うんですけども。いかがでしょうか。

堀内 いままでの話の延長なんですけれども、大塚が始まって25年の流れでいうと、3年経って、僕も西君も研究室から出ましたよね。僕は、京都で研究のおつきあいで、関西の教育行政学会に入れてもらって、相良さんと吉本さんと始まった学会なんだけれども。やはり感じたのは、関西で、博士課程持っている大学は、京大と阪大なんだけれども、その人たちと研究会や学会でおつきあいさせてもらって、本当にシュレーの色が違うと思ったわけね。東京と京都というロケーションの違い、あるいは東京教育と京大という大学の違いもあるけれども、ひとつに研究室のカラーの違い。まあ、京大は教育行政なんだけれどもね。さっきみなさんから出たように、メインとサブの話やそれから徒弟奉公みたいな部分も含めてでいいと思うんだけど、きわめて、この大塚研、吉本研究室というのは、組織論的に動いた研究室だと思った。外からみたら、気色悪い所があったかとは思いますが。京都の場合、相良先生もご退官されて、兵藤先生、それから高木先生も来られたばかりかなあ、そういう段階だったんですけども。要するに個人主義な色彩が強くて、院生は自分のテーマを持ってそれをやればいいという。だから何か、まとまってやるというような発想はなかった。先生もそういう意味で院生を大事にするっていいのかもしれないけど、院生の個で

やってる研究テーマを束ねるようなことは一切しない。われわれの場合は、むしろメインとサブで、自分のが弱いとサブがメインになってしまうこともあるというような。だからそういう、カルチャーショックみたいなものを受けた気があるんですよねえ。ただ、それについては、今から思えば、悪い意味でなくて、25年になってみんな育ってきてくれたと、後輩達がね。そういう面から考えると、意味があったんだろうとっているんですね。こういうことが東京教育大学、あるいは筑波のスクールカラーになっていったのか、この研究室の独自のカラーなのか。ちょっと、二重の関係だと思いますけど、受け継がれてきた面だろうと思うんですけどね。だから、いままさに25周年云々という話ができているということのような気がしますね。

大西 時期的に言えば、次は、やはり、堀内さんと西さんと二人抜けて、丁度筑波への移行期ですね。それで、吉本先生も退官されてね、昭和53年でしたか。その後ですから、永岡先生中心に。小島先生はいつ来られたんですかねえ。

小松 昭和52年の10月に来てらっしゃいます。

大西 移行の真最中ですよ。その時にやはり共同研究みたいなものを新たな形で掘り起こすっていうんでね。たまたまこれ永岡先生、第1回のところで計画論を出されているけれども、計画論と、それから学校の意思形成でしたか。そういったものを学会発表をやったり、共同研究の流れの中で継続させていくということが一つあったと思う。

天笠 そうですね。学校経営計画論と、もう一つ研修ですね。教員の研修があって、その後に意思形成というのでしょうか。プロジェクトがいくつか走り出したんですよ。そういう動きがしばらく続いていたんですよ。それが、4巻、5巻、6巻、7巻、ぐらいになるんでしょうかね。

大西 この辺のところは小島先生がみえてないから分らないんですけど、教育大といいますか筑波に小島先生が戻ってこられてね、自分が院生の時とは雰囲気随分違ったと思うんですよ。そういう共同研究をどういう風に小島先生自身が関わっておられたのか。

堀内 われわれが入る前だけでも、あの時は吉本さんの研究室に小島さん、安井さんがいなかったらうけれども、...。他の研究者との横の広がりの中でやるということがあったと思うんだけど。それで、例の官僚制の問題とかやってみたと思うんだよね。小島さんのイメージとしては、たぶん共同研究のイメージというのは研究室の枠だけでなく、横のひろがりの中でやるっていう、経験的な、イメージをもっていると思うんですよ。ところがいまの話で言えば、ほとんど研究室だけでいろんなものやっていた。

小松 そういう面で、人数が揃ってきて、自分達でできるようになってきて。

天笠 とにかく、筑波の中で動いていた研究室だったことは間違い無いと思います。他の研究室は、それぞれ個人が個々として動いていた。そういう研究室と比べると、共同で進めることが多かったと思います。

大西 それに対してはね、向こうに行っても、それほど違和感がないといえばおかしいけど、...

小松 ただね。そんなに拘束力があるような感じではなくて、割りと自主的に心理的に関わってき

たような気がして。

堀内 そうは言うけれども、25年振り返るといろんな節目節目で組織の見直し論がずっとあったでしょう。最近僕はあまり聞いてないから、あるか、ないかは知らないけれども。意識のズレというか、だんだん時間が経つにつれて、出てきた一つの証左だと思うんですよ。よく吉本さんは「我が社」という言葉を好んで使われたのを記憶しているし、2代目3代目なんて話もしてたし。もっと話としていえば、やくぎの世界に近づいて。親分がいて、若親分、若い衆っていうような類のヒエラルキーのような意識があって、、、。やっぱわれわれ、いっぺん出ちゃうと、その部分についてはいた頃のイメージがだけしか残ってないもんだから、それで、後輩を見る目とかね、どうしても縦のヒエラルキーの中でというのはあったと思います。それに対して若い人は、そういう意識がだんだん薄れて反発するとか、そういうのが組織論となっているいろいろ現れたと思う。

小松 それはわからないでもないけど、その人達が同じ学問分野の中で仕事をしていればあれだけど。結局、やっぱり学校経営という、これは個人を抜きにして、同じディシプリンの中で仕事していますという事であれば。

堀内 もう一つは研究室以外の研究メンバーを加えるかという問題ですかね。

西 筑波へ行ったあたりですか。条文を設けなくて希望する人はどうぞと。

小松 小島さんの路線なんだと思います。

大西 すぐではなくて、しばらく経って、昭和60年代に入ってから、ここ10年くらいではないですか。

西 その時代には、結構研究室においでになった現職の方、メンバーにね、継続した方少ないかもしれないけど、多くなりましたよ、急に。

大西 あと、西先生のところからもそうだけれども、院生が派遣されてね、他から来てね、他との交流も盛んになってきたと。

西 そうですね。僕はそういう意味では、自分の受持ちを、修士論文を指導していて不安なんですよ。これでどうなんだろうと。この問題意識で大丈夫かと。これはぜひ他流試合というか、少なくとも、自分の枠を超えて他の人に見てもらいたいと。それために、僕は上越に行って10年間位は、自分の研究室に受け持った人はね、基本的に全部連れてきたと思うんです。最近は合う人、合わない人見てね。自分の意識がそうだった。つまり、この研究会は、学会ほどではないけれども、別の角度からね、いろいろ研究討議ができる場で、自分の不十分さを補って欲しい。まだ、吉本先生がお元気なときには、僕が受け持った現職の院生の方は非常に印象深かったですよ。

25年間の研究活動に対する評価

天笠 少し話が違ってもかもしれませんが、やはり、紀要一つ一つが、ある意味では研究者養成というか、人を育ててきたというのでしょうか。そういう役割を紀要は果たしてきたと思うのです。それぞれの時代の人々がそれぞれの仕事をこの大塚の紀要に足跡として残したということがあるのではな

いでしょうか。それがそれなりに引き継がれてきたと捉えられるのではないのでしょうか。それは話していただきたい3つ目の「これから」ということとも関わりますが、紀要の刊行を含め本研究会の果たしてきた役割をどう評価されますか。

小松 問題はね、25年経って、ちゃんとそれぞれのテーマみたいな問題を発展させることができたのかどうか、ということが少し気になるんですよ。このあいだ、ある新聞社の人に来て、最近の教育改革について話をした時に、例えば、学校の自主性や自律性の問題もそうだし、教授組織の問題もそうだけれども、その辺のことは、それこそ15年、20年あるいは、25年前にすでにわれわれは勉強させられてきたテーマなわけでしょ。それでその人に、大塚っていう研究会があって、こういうメンバー達が入っていて、って言ったら、「今ご活躍の先生ばかり」なんてお世辞があったんだけれども。でも、そういう面で、この大塚の25年の歴史の中で、実は今、教育改革の中でかなりキーワード的にいわれている問題がね、みなさん25年やってきたことなわけで。しかし、それを理論的に深められたかどうか。で、今は、割合、実践の場面で、みなさん、それぞれのところで仕事してらっしゃるんで。私は研究会としていうと、理論としてどの程度深められたんだろうかな、ってことは、われわれだけでなく、学会全体もそうだけれど、その辺は少し課題が残っているっていう気がするんだけれども。ただ、大塚がこの時代から扱ってきたテーマが、ある意味では、ようやく具体的な学校改革とか、教育改革のテーマになったという点では、すごい先見性があったし、そうしたときに、さっきの話に戻るけど、勉強させられたことがすごく良かったなという気が改めてするんだよね。

天笠 教授組織にしても、学校の自律性にしても、どう、もう一步、突き抜けていけるかどうか。さらに発展させていけるかどうか。そういうことが改めて課題になってきていると言えるかもしれません。

堀内 将来の話というのが、今あったんだけれども、僕は、25巻までをこう見ていて、3巻がひとつのエポックかな、という気がするんですよ。吉本さんが退官のときだから、一番記憶に残っている巻なんですよね。吉本先生の経営論を皆がたぶん扱った。亡くなったあとの、特集号のときもそうなんだけど。さっきの小松君の話もそうなんだけれども、やっぱり良くも悪くも大塚研って吉本シューレ、まあ2代目、3代目と来ているわけだけれども、まあそれは置いておいて。今ちょうど今年7月に地教行法が変わったんだけれども。2000年に向けて、教育改革がいま全面的に進んで、われわれのフィールド、生きていけるところが大きく変わろうとしている。で、そうするとわれわれの世代、同じ感覚をもっていると思うんですが、われわれは吉本先生の下で勉強して、結局、吉本さんなんか60年代の前半ですよ、そこでされた仕事があまにも大きかった。地教行法ができて、新しい意味での学校経営、教育行政の枠組みが作られていく。で、それに対して、理論的な構築も、吉本さんを筆頭にして何人かの先達が行った。われわれはそれを30年間食いつないできた気がする。食いつないできた枠組みが大塚でもあった。で、今でも、僕なんかは若い人に言うんだけれども、やっぱり忸怩たる思いで語らなければならないのは、今言った吉本さん、近

いところで高野さん、伊藤さんなんかと同じシューレというか東京教育のなかでは忘れちゃいけない人だと思いますけどね。それから持田さんであったり、市川さんであったり、行政の方まで広がりますけれども。そういった人たちが、60年代にかなりパイオニア的な書物を出されていて、研究枠組みがつくられたと思うんですね。ほんとに今に至るまでわれわれはそれらを乗り越えられずに来たような忸怩たる思いがあるわけで。その中心にいた吉本さんの仕事、っていうのはわれわれにとって大塚の枠組イコールであったし、それは、良かれ悪しかれ地教法っていう枠の中での仕事だったと思うんですね。先にいった3巻のときにも、そういったことを書いた覚えがあるし、また亡くなられたときの特集でも皆、同じようなことを言っているんですよ。それが今、変わろうとしていて、そうすると、そのままスライドすることできないけど、吉本さんなんか60年代の前半にされたことをわれわれ今、しなきゃいけない段階っていうか、そういう思いがあるんですよ。まあ、地教法の制定ほどね、今回の改革がダイナミックかどうかはわかりませんが、少なくとも新しい理論枠を作らなくてはならない段階に来ている。そうした時に、じゃあ、大塚で培ってきた枠組みとは一体何であるのか。こうやって今座談会やっているわけだけでも、総括する段階かと思う。大変広がってきてますので、誰がどんなことをやってきたのかということから始めなきゃいけないだろうけれど、総体として、このメンバーが、大塚のメンバーがこの25年間にどういう仕事をしてきて、それは他との区別でどんな特徴を持たされているのか、あるいはどんな評価をされているのか。それがまず一つですね。で、その中で、今言ったように、これからの、わが国の、僕は取えて公教育経営という言葉を使いますが、行政、経営を合わせたような部分というのがどう動こうとしているのか。それに対してわれわれは蓄積を踏まえて何ができるのか。まさにその段階、ターニングポイントに来ているというのは大変強く意識している。

小松　そういう意味でいうとね、吉本先生は『学校経営学』の中でもそうだし、最初の頃で僕らは勉強確かしたと思うけど、校長のリーダーシップの問題ね。もっと、きちっとやりたかったという思いが吉本先生にあったのかもしれないと思うんだけど。そういう意味ではその研究なんかを小島さんが今、そういう意識が強いかもしれないけれど。

堀内　繰り返しになるけども、吉本さんはやっぱり学問的な姿勢は、かなり政治的なものであったと僕は今でも思ってますが、同時にプラクティカルな問題意識も強かったと思うんですよ。吉本さんなりの学校研究の枠組みを作られている。それは、今から思うとオーソドックスというか、コンサバティブなものだったと思う。これがこうあるから、こういう前提で、という手法を使われていたと思うんですよ。われわれは吉本先生に対して学問上の批判的な観点を持ち得たというのは、では、その枠組みがなくなったらどうなるのかという話を常にしてね。例えば、まあ自律性の問題もそうですよね。彼は相対的な自律性ということで、行政の措置が終わってから学校経営が始まるんだと。行政の枠組みとは今の自分としては問わないというスタンスを持たれた。じゃあ先生、全然変わりましたよと、どうするんですかと、聞きたい気がするんですけど。まあ、それは今いったようにわれわれの課題として向けられているだろうと。だからわれわれは、その狭間の中で25年や

ってきたわけだから、文字どおり今その前提が変わろうとしている。ならば、従来の吉本先生のつくられたものに縛られたり、しがみついたりするのも許されないという話になってきていると思うんですよね。だから大塚の枠の中で何をするか、どう総括すればいいのかという話だとも思います。天笠 そういう点では、話は3つめの「これから」ということに入っていくと思いますが、少し戻しまして、他にこの25年間について加えるべきこと、あるいは話として落ちている点がありましたらお願いします。

西 僕は、この学校経営研究の、学術雑誌としての水準なり、発展可能性について考えて欲しいと思う。学会そのものではないけれども、かといって非常に狭い小グループの研究集団ではなく、中間に位置し、両方を睨んで存在価値を保っていく研究集団であればいいと思うんです。で、良い意味で成立の背景だとか、あるいは核になっている人がいていいけど、しかし、運営事態はメンバーである以上は、、、かといって普遍主義というのは、、、大塚シューレの全体的な性格といいますかね、特に他の大学の人とのおつきあいは、まあ、僕も不十分だけれども、ある程度いえるんですが、中身をいうと、たとえば、アメリカの研究がメインだとか、調査研究がメインだとか、大塚の場合は必ずしもはっきりしていないとおもう。これは良さでもあるとおもう。ある大学は、歴史研究に集中したり、あるいはそこに味を持たせたりしている。あるいはアメリカの最新の研究をつぶさに追って国際的な視野で、学校経営・教育経営研究を追っている。その点では、大塚は特に人数が増えてからは、個人の問題関心を大切にします。私は、それは良い傾向であったと思うんです。ある人は、ここでいえばソビエトに最初に関心があった人であったり、ある人は歴史研究であったり、あるいは教員団体の問題であったり。それを交えて枠づけられないでね。吉本先生のときの退官記念のとき、「学校の内外を見つめて」です、永岡先生の退官のときは「教育行政と学校経営の間」。実際には、リーダーなりの問題意識が出てきていい。しかしながらもうひとつ考えると、今後のこの研究室のグループの位置づけ方だけれども、基本的にはこの会に集った人々として意識的な取り組みがあっても良いと思うんです。吉本先生の『学校経営学』の存在価値の大きさは、行政と学校の内部のことについて、吉本先生の考え方は両方を睨んでね、最終的にどういう事実としての教育を作るのか。そういう課題設定だと思うんです。それは今まさに今日的に問われている。それをぜひ意識したいと思うんです。

研究会活動と紀要の在り方

天笠 3番目の話に入りたいと思いますが、その前に、いままで話を聞いていた、加藤君、何かありましたらお願いします。

加藤 一番感じたのは大塚学校経営研究会と、イコールというか吉本先生の存在の大きさですか。僕が入ったときにはすでにお亡くなりになられていて、活字でしか吉本先生のおっしゃっていることを読めないわけですが、大塚で、こうやってこうやるものだという話を辿っていくと、吉本先生の影響力というか、学問的なものだけでなく、行動といいますか、そういったものに辿り着

くことが感じられます。僕が入ったときには、「院生何やっているんだ」ということをかなり言われている状態でした。僕も見取り図が良く分からなくて。それと今のお話の中で組織論的な、という話がありましたが、僕が入った時には、大塚関連のイベントというのはバラバラにあったという感じがします。まず、木曜の毎週一度の研究会があって、そのあと飲みに行ったり、春と夏の合宿があって、関東の方では月例会というのをやっている。こういった座談会を含めて、大塚の先生方が集まってわれわれ院生と一緒にさせて頂ける場所があるのですが、どこもつながらないような感じといますか。お話を聞いていると、会が発展してきたわけですからつながっているのは当たり前だとは思いますが、何かの行動が次の行動に、一種、有機的な連関を感じます。僕が最近いろいろわかってきたということもありますが、僕が入ったときには院生の方でそういうのが無かったのではないかと、…。先生方の大学の事情もありますし、筑波で起こっていることを見守ってらっしゃるのかなと。

堀内 加藤君の話もそうなんだけれども、いつぐらいだったかはっきりしないんだけれども、筑波での体制が整った時位に、われわれも縁が遠のいたというか。たぶん筑波の中で論議されていたと思うのは、われわれの時は研究室の研究会が殆どイコール大塚だったがそれが二元化してくる。そういう意味で小姑がいっぱいできて。十年ぐらい前だと思うけど、それならもう一度筑波の院生をベースにしたら、と言ったことが記憶に残っているんですね。蓄積ができればできるだけ、この大塚研というのは、年寄中心になってしまっただけで、なかなか若い人の発展の場にならないということが、例えば、加藤君の発言のなかにあると思う。これは一つの課題だと思う。われわれとしてはいいものを残してもらいたいというのがあるけど、今の筑波の院生を圧迫してはいけないとも思うし、それが組織的な課題だと思う。ただ、もう一方で言うと、さっきのことも続きになりますけども、たまたま今日ここ（京都教育大学）で、経営学会の理事会と行政学会の研究推進委員会、同時並行でやるっていうのは象徴的なんだけど、大塚の多くのメンバーが今言った2つの学会で中心に、それなりの役割を果たすようになってきているという実態がありますよね。その学会だとかとの問題、その関係の問題が出てきたと思うんです。大塚に積極的に他の人を呼ぶというのも学会との関係で関わっていると思うし、紀要そのものも、個人的にいうと意見は分かれるかもしれないけど、割と、僕は、この大塚の紀要にまともなものを書いてきたと思うんですよね。いろいろ業績出したりするときに、普通のカウントでいくと学会誌じゃないしね、全国学会じゃないし、「その他」の「その他」なんですよ、研究会だから。ところがね、その他だからって形式上外していいかっていうと、僕にとっては外せないものが入っているんですよ。むしろ学会誌に書いたものよりもね、こっちのがね、手間暇かけたとかね。今から見たってね、自分にとっては価値があるよ、というのがあるんです、僕自身にとってはね。だから、その意味で、形態はともかくも理論的な蓄積としてね、これをどう繋げていってもらえれば、という話はどうしても残る。さっきも言ったように良しも悪しくも吉本シュレで来て。それから、僕はタイに行っていたときだと思っただけでも、永岡先生を囲んだ座談会があって、そのあとの話として永岡先生がこれまで極めて

正当というか、研究の蓄積をされてきたということをや若い人たちが改めて認識したと聞いて。「教育委員会と学校の間」ですか、もっといえば地域教育経営という概念、僕はずっと論争してきたつもりはあるんだけど。今から思うと、今の日本の教育行政、地方教育行政や学校経営のあり方が見直される、どう見直されようとしているかという、吉本さんや永岡さんがやってきたこと、あるいは提言してきたこと、というのがみんな下敷きになってきている。いろいろその限界なり、制約ってあったと思うんだけど、それを辿っていけば、いま言ったみたいに繋がってくると。必要な部分はあるにしても、大塚でいわれてきたこと、この25年間というのは、日本の今言ったような一定のリアリティを持った教育行政なり、学校経営というものの一番中心に位置づいてきた、というふうに総括できるだろうと思うんですね。それをどう繋ぐというのは、まさにこれからなんだけれども、学問的な意味合いで、この大塚、この学校経営研究がね、これまでの蓄積っていうものを集約して縦に繋げていくとか、私たちとしては課題設定としてありうるわけだし、なきやいけないだろうと。そういう気がしてるんですね。

天笠 今の堀内さんのお話の中に、論文の「その他」っていう話がありましたが、私の業績リストの中にも、やはり「その他」というのがあります。やっぱり大塚の何本かは落とせないんですね。対外的な評価は高くないかもしれないけれども、少なくとも自分の研究の歩みからすると、大塚の紀要の何本かは「その他」の中に入れとかなきやいけない。そういう何本かはあるわけです。そういう意味では大塚の紀要は、一人一人の個人史としての歩みみたいなものが出てくると思うんです。そういう言い方でいえば、それぞれの個々の人の研究者としての歩みの中で、それぞれ自分で位置づけられるというんでしょうか。そういうふうな性格をもっているんでしょうか。そういう意味でいうと、大塚の紀要は一人一人の関わりが、これを支えているということになります。これから若い人もやっぱり、もしこれを続けようとするならば、一番の原点はここにあると思います。

ところで、若返りが課題なんだろうね。先ほどお話しにもありましたように、第1巻が、20代の人で作られたということですが、そういう点では今も20代の人、あるいは30代の若い人が大塚にはいるわけです。ですから、ここ何回か、編集を担当させてもらってますけど、やりたいことのひとつは、20代30代でできるだけ占めるということです。しかし、そういう方向で働きかけているのですけれども、どうも願うようには進みません。それぞれの人の位置づけ方がやっぱり、発足時とは違っています。それはやむを得ないとは思いますが。そういうあたりのところを、次に引き継ぐ人たちがどう自分なりに位置付けをしてくれるだろうかと、そこが大きな課題なのかなと思っています。それで、できることなら、この24巻、25巻が引継ぎの巻みたいなかたちになっていくといいかなあと、私自身は思っているわけです。ですから若い人たちにできるだけ執筆者として登場してもらいたいと思いきかけをしているわけですが。なかなかその辺をわかってもらえないところもあるわけです。私は、そんな意味でこの25巻を一つの節目にしたいと思っているのですけれども。

小松 たぶん、世代によって違うと思うんですね。もうひとつはやっぱり、学会がかなり大きく

なってきた、特に期待する30代と40代の人たちが、例えば、木岡君とか水本君という人たちが学会の中でも理事をやったり、編集委員をやったりしてるわけでしょ。そうすると彼らにとってみても、大塚の位置づけ方が少し変わってきているのかなあという気がするし。それでさらに各大学でやっぱり弟子を育てる年頃になってくれば、こんどは各大学の中で仕事があると思うので。そのあたりは創刊時とは違うんで。それぞれの世代の中で、それぞれに位置づけ直す必要があると思う。西 ただね、僕は、ちょっと一つの提案をしておきたいんだけど。基本的に3つぐらい中身があるんですけど、『学校経営研究』について。一つは、全国学会誌でもない。あるいは個別大学や研究室の研究誌ではない。その間にある中間のね、持ち味を出すべきだ、と。それでね、中身としては、僕はやっぱり、多少、挑戦的、あるいは問題提起的、ひょっとしたら全国誌では評価が得られない、これは大胆過ぎるとかね。しかしひょっとしたら、ひょっとする。これは着想の新しさとかね、それを大事にしたいと思う。若い人を育てるという意味でも。2番目は、この分野の研究上の重要情報が入っていること。すべてカバーしなくていいんですが。研究上、教育行政、学校経営、教育経営研究上はかなり最新のね、その年度毎に重要なもの情報、一編でもいい、あるいは外国の文献でも。それを入れてほしい、光るものを。3番目は、僕はやっぱりよい意味で伝統を引き継いでね、小・中・高等学校の実践家がこの会に参画していて、その方からの、単なるエッセイじゃ困るんだけどね、やっぱり研究的志向を持った実践感覚のメッセージ、論説を書いてもらう。これが、僕は大塚にとっては大事だと思う。それで、常に研究がどうであろうか、あるいは実践や学校経営をどうすればいいか。こういった模索ができるそのような中間的な研究団体としてのね、やっぱり、やや特色のあるね、そういう学会誌としてあと25巻続くべきだというね、。

小松 まあ、会としての性格づけで途中で議論があったり、場合によっては存続の危機みたいなものが無かったわけではないけれども、不思議なのは、これをさあ、他のところの例出しちゃアレだけれども、この会を学会にしようという声は僕の知っているかぎりでは全然無かったでしょ。だから、その辺がある種のシュレー的なものでいいじゃないか、みたいなものが、どっかにあるんでしょうね。

堀内 まったくなかったわけじゃなかったね。ちらっとあったね（一同 笑）

天笠 ただ、結果的には“学会バブル”に乗らなくてよかったと。次々と発足させたのはよかったものの、今、維持に苦労しているところもありますよね。

西 もしやっていたら、やっぱりそれはよくないですよ。経緯もあるし。だからむしろ中間をね、うまく存在を作っていくことに意義があるんじゃないですか。

堀内 今の若い人の見方とは違ってきているのかもしれないけれども、たぶんここにいる人たちにとってはいえると思うんですけどね。この研究会っていうのが、ひとつは研究者の養成としてのファンクション、それから大学教師の養成というファンクション、その研修までも含めてでしょうけどね。そういうものを僕はかなりもってきたと思うんですよ。例にとっていえば、吉本先生の個人のあり方なのかもしれませんが、その辺、ない交ぜにやってますけどね。やっぱり後追いしてい

るんですね。研究会、例えば、もちろん今は大学のキャラクター違っているんだけど、研究会の運営であったり、卒論や修論の指導のパターンであったり、なんていうのはやっぱり大塚がベースになってわれわれやっているであって。たぶんみなさんそうだと思うんですよ。それはわれわれが研究室と大塚とそれぞれイコールであったというね、そういうことがあるんだけど。できたら、これからもそういうものであって欲しいとね。そういうのは 20 年前とは様子が違っているわけだから、学会のあり方とかね、研究の色合いだとか、当然違っているから。コアになる部分、自分にとって、学生なり、院生を指導していくというね、さっき西君の話にもあったんだけど、そういうときに、この大塚というのが意味があってほしいという気がしますね。ただ、研究上の問題でいうと、今の若い人に酷であると思うのは、われわれにとってやっぱり 10 年の蓄積でいろんなことが考えられて、だいたい 1965 年くらいがひとつのエポックであったと思うんですね、研究上。それでわれわれが院に入ったのはそれから 10 年くらい後でしょう。だから 10 年間ぐらいのトレースでなんとかキャッチアップできたっていうつもりがあるんですよ。まあ、キャッチアップしたまんまで、さっきも言ったように発展が無いのは忸怩たるところがあるんですけど。ところが今の若い人たちは 30 年でやんなきゃいけない。そうすると、吉本先生の顔を見たことが無いということも含めて、やっぱりそういった 60 年代中頃の仕事というものを無視できないでしょ、今の人達だって。われわれだって、その間に依拠しているところがあるから。ところが、まあ広がってきているから、それだけじゃあいけないと。その中で自分のものを作らなきゃいけないと。そういうところでね、キャッチアップするのに相当時間がかかるだろうという気がするんですよ。そういう意味ではね、この大塚の枠の中で、何か得意なものを若い人達に期待すると、それはやっぱり酷かなあ、というね。ただねタイトルどうりね、『学校経営研究』、まああえて先ほどのように限定するわけではないんだけど、やっぱりコアとしての組織論であったりね、権限論であったりという。学会は広がっちゃってかならずしもコアになってないというのがありますからね。この大塚の特徴としてはそれに求めてほしいというね、気はしますね。

外的条件の再編と大塚の取り組み

大西 良しも悪しくも吉本シュレーを引きずっている話とね、一方では、ここ 10 年くらいのことだけでも、外部の人に依頼原稿をすとか、講師として合宿の時に招くなど、ということも動きとしてはありましたよね。

堀内 それについては小姑の話になっちゃうんだけど、これはまったく個人的な感想としてね、メランコリックであり、なおかつコンサバティブなんですよ。私にとっては、大塚っていうのはね、若い人達を中心となって、つくるならつくるで意義申立つつもりは無いけれども、個人的な、あってほしいなあという論で言っちゃうと、この大塚の枠の中で質を高めてもらいたいなというね。やっぱり感覚的には残っているね、僕なんかは。さっき言った、このいろんな 25 年のなかで、会の持ち方をどうしたらいいかという場合でも、どれだけ自覚できたかは分からないけれども、結果

的にはそういうかたちで発言してきたと思うんですね。だから僕は拡大路線に基本的に賛成しなかったし、他の関係ない人をいれるということには。もしそれを譲っちゃうとなんか、わけわかんなくなっちゃうのね。何の会なんだろうと。会そのものの存続の危機というものも出てきただろうと思うんですね。今後は今後で小姑はあまり言わない方がいいと思いますけどね、その意味ではね。

天笠 近い将来問題が訪れる可能性のあるものとして、ひとつには外的条件としての再編の問題が出てくると思います。先ほど前提が変わったというお話がありましたけれど、その前提の現実的なものとの絡みが生ずるのではないかと。いわゆる行政・制度・経営ということですとずっと走ってきたわけですが、それ自体の存立が難しいといいますが、再編が求められるということ予想され、それらにどのように対応して乗り切っていくのか。あるいはそういう状況に対応させて、いかに枠組みを組み立て直していくのか、このあたりのことが課題になると見ております。言うならば、そういう外的条件としての学問領域の再編について、われわれとして考えていくのかどうか。その辺のところの取り組みが起こってくるのではないかとと思うんですね。それに、この紀要が対応しきれぬか。そういう意味では30巻まで行けるか行けないかが、ひとつの勝負かなって思っているわけです。場合によってはそこをうまく乗り切れない可能性もありうるのかなあと、そんなふうに思っているのですが。

小松 それは、研究そのものがね、一方では学会がどんどんできて細分化していく中で、他の一方では実態もそうだし、研究そのものも統合化の傾向もあるわけでしょう。われわれの身近な学会では行政学会と経営学会を統合したらって議論もある一方で、制度学会が出来たり、政策が出来たり。両方があるじゃないですか。その辺のことが一つと、それから、それぞれの大学、例えば、筑波の大学における研究協力の体制が、昔のように教育大のときのように研究室が法制度、行財政、学校経営があってみたいのとは違う話で出来たはずなのが、いまのところ僕らが理解するかぎりにおいては、教育大時代のものを引きずっているわけでしょう。筑波の院生にとってそれらがどうなのかということにもよるんだろうけれども。

堀内 いま天笠君言ったこと、小松君言ったこと踏まえてなんだけど、二つちょっと感じているんですね。ひとつは、ちょっと前に戻っちゃうんだけれども、まあ東京教育であり、筑波でありね、この領域でだいたい3つのジャンル、他大学で2つであったりする場合もあるとは思いますが、ようするに経営があって、行政があって、制度があると。われわれは、経営というところを足場においてやってきましたよね。例えば、私の例で言えば、京都教育に来ますと、それを一人でやらなくてはいけない。まあ、どっかにウエイトを置いているんだけれども。僕ははずうと思うんだけれども、さっき京大の比較をしたんだけれども、やっぱり自分としては、よかったなって感じを持っているんですね。例えば制度をやっている、われわれがやってきたような学校の中の問題ということを果たして本当にわかっているのかどうか。行政も然り。われわれは経営をやっている、政治的なものも含めて、大きなシステムが動いていくのを見ると、そうすると否応なしに行政、政策や法

も含めて見ざるを得ない。その接点はわれわれの研究をベースに作ってこれただろうと思っているんですよね。そして、逆は決して真ではないと思う。このメリットは、やっぱりね、大塚なり学校経営研究というものが活かしていくべきだろうと思っているんですよ。天笠君が言ったこれからの展開の中で、『学校経営研究』の活用なども含めて、さっき言ったように学会誌ではないし、形式的にしちゃうと高いランキングでカウントできないのかもわかんないけれども、あの実質において、例えば、いま大きな転換点に立っていて、いま皆さん活躍しているわけだからねえ。やっぱり結集できるような形をもう一回どこかで、会で、意識的にしていいいのではなからうかと。かなり頻繁に引用されるような特集を組んだり、これからの、例えば学校の自律性に向けての改革だとかね、この雑誌で書かれているのが学会誌以上に集約されたね、ひとつのものになっていくとかね。僕は、今意識的にやればできると思うんですよ。それだけのスタッフがいるし、また、そういった枠を25年間培ってきたわけだから。学会誌であると、まあ、みなさん編集委員会で関わっているわけだけれども、苦勞している部分があると思うんですよ。一つの編集委員会の判断でやると問題になるなど、躊躇しながら中途半端なものを書かざるを得ない。その点、大塚は意識的にやろうと思えばできるんですよ。だからさっきの話で言えば、吉本さんのね、まあ没後10年になってくるわけだけれども、かたちは吉本学校経営学の再評価なり、総括とかたちをとってもいいけれど、照準は、まさに吉本さんが言って果たせなかったような枠組みが今作り直そうとしている。またシユレであるわれわれが何をそこでね、作り直すことが出来るのか、それが社会的に問われているといった意味合いになってくるしね。だから再生できるチャンスもわれわれにあるといえる気がするのね。だからわれわれの自覚であり、敢えて能力とは言わないけれども、どれだけエネルギーをそこにかけてもらえるかということだと思いますけどね。そういう条件は、僕はあると思いますけどね。

大西 おそらく5年ぐらいのスパンの間にね、教育改革がどんどん進行していくわけでしょ。それに合わせて、新しい理論的枠組みを構築することが求められてくるわけだね。そこに集約するようなかたちでこれまでの蓄積を、発展させていくというのかなあ。そういった展望は確かにあるよね。さきほど堀内さんのほうからは、小姑あまり口出さないほうがという話があったけれども、むしろこの間忸怩たる思いがあるんだけれど、われわれの世代も問い直されている気もするんですよ。ですからわれわれの世代と、もう一つ下の世代というんでしょうかね、っていうのがどういうふうな、この紀要を通じてどういう対話ができるのかというのがこれからの方向性かと思う。

今後の課題・提案

天笠 そろそろ予定の時間です。最後に一人一言ずつお願いします。

堀内 来年の25巻には間には合わないと思うんだけど、まあ25年、吉本さん没後10年、まあいろんな意味でね、2000年(笑)、あのう、キリがいいんですよ。それで特集の組み方で紙数が許されればなんですけど、教育行政そのものも当然リンケージするけれども、この雑誌の性格から

いうと、学校経営あるいは学校の自律性の問題にできるだけ集約していいと思うんだけど、あのう例えば、吉本さんの相対的な自律性論であったり、永岡さんの地域教育経営論であったり、そういったものをわれわれある程度イメージとして持ちながら、今回の制度的改革も含めた新しい学校の経営のあり方、あるいは自律性の確立の方向性について「老壯青」、なんていうとアレですけど、大体三世代になってきますよね。われわれを第一世代とすると、木岡・水本あたりが第二世代かなあ、もちろんいろんな人が入っていると思うんですけど、それから加藤君がここにいるけど、今の院生の世代。だいたいこの三世代位で、例えば同じ枠組みで3人並べて書きたいなね。いくつかの柱、前、吉本さんが亡くなったときやなんかの枠があると思うんだけど、まあそれを踏まえながらも3つか4つの枠をつくって。ひとつはやっぱり、これまでの『学校経営研究』の、この紀要の研究の批判的総括があって、それから制度改革を睨んでのあり方の評価があって、それから学問的にわれわれこれから何をしなければならぬのかと、こういったひとつのマトリックスを作ってみてね、その3つの見方を通して見るみたいだね、そういう総括の仕方をしたらどうかと思いますね。

小松 いろんな問題があると思うんだけど、私はちょっと5年後、10年後がイメージしにくいところがあるんです。それは、自分の問題としてずうと、大塚っていうところもあるけれども、それ以上に、いまの職場での仕事のあり方との関わりで、そういう意味では広がりを持っているわけで、今の院生や若い人たちにどう関わるかという意味もあるんだけど。その辺のことと、それから自分のこだわりのなかで学校経営研究っていうことの、いままで何やってきて、残された課題は何かっていうことを、せっかくだから世代の違う人たちとの間で、交流をする場になってくれば、学会誌にもない、商業誌にもないものとしての一つの特徴も出てくるだろうし。さっき西君がいったことと関連するかもしれないけど、理論的な枠組みの中で、提起できる場としてこの場が活用できればいい。その面では、ほとんどやられてないんだけど、これの総批判というか書評というようなかたちで、合宿みたいなきにね、もう少しやれるようになったらいいんじゃないかなあということですね。それから3本目には、月例会なんかに出ていて思うんだけど、この間の12月の月例会のときもそうだけど、若い人たちがもっと発言してくれる研究会になっていけるように、運営の仕方を、バトンタッチも含めて考えていかなきゃいけないな、という感じはしてますね。学会になんてかたちにはしないほうがいいし、ある意味ではこだわりがあって、研究室の雑誌として残していったほうがいいかなと。ただ、自分のなかでは使い分けが出来ているんだけど、若い人たちの中で使い分けが出来ていないんじゃないのかという感じがしてね。その辺は少し議論をしていく必要があるような気がしますね。

大西 さっきの教育改革とは脈絡のない話なんだけれども、いつごろだったかよくわからいけれども、世界の学校経営をやろうという話が一回出たことがあったけれども。それをやろうとしたら他の研究室に似てるなあ、なんて話もあったわけなんだけれども、実際に見てるといろんな国をテーマにやっている人が多いので、それが単発的に出てくるんだけど、どこかで一度、共通のテーマ

でね、比較研究みたいな、比較学校経営というか、そういうのも試みられてもいいのではないかなと、思いつきのですが。

西 今日座談会では、小島先生の時代のことをあまり言ってなかったんですね。小島先生が事実上、この会のリーダーになって頂いているんだけれども。そこで僕はひとつは、堀内君と似たようなところがあって、伝統精神の良いところは引き継いでもらいたい。これからも存続するかぎり、いわば、良質な仕事としてね。ただ、それは懐古主義や自分がたまたま第一世代にいたからではなくて、それはやっぱりこの会に集った者の基本精神なりね、こういう魂が存在価値があったんじゃないかと自分は思う限りで、やっぱり意見は言いたい。言うけれども、しかし、最終的には、この会が良い意味で発展するとすれば、やっぱりそれぞれの時代に、、、もっと分かりやすく言えば、若い人が納得してね、会費を出すのも、研究会に参加するのも自分にとってプラスだと、こう思えなければ意味がないので、ぜひその点は小島先生の時代に、またこの会の運営自体も含めて、一度議論したらどうでしょう。つまり、暗黙の、何かわかっている、あるいは古いものはこう考えるとかの不信感が出てくるじゃなくて。僕はその面で言うと、例えば、東京電気大の吉村さん、青木先生とか、彼らの存在価値は非常に大きくて、出身の所属というよりは精神においてね、この会の存在価値を認めてくれて、積極的に貢献してくれる人が活躍できる、これも僕にとっては大事なことで、決して内集団といふかね、形式にとらわれないでやっていただきたいと思います。その点では小島先生も多少、遠慮されてきた部分もあるかもしれないんですけど、新しい時代のね、まあいろんな側面も含めて、この会がどうなればいいのか、やっぱりこういった点については、いつも議論していいんじゃないですか。

小島 最後にちょっとだけ。僕はね、前から考えていて、学校経営学教育ていうのをね、こういうもの、つまりわれわれが授業でそれをやっていく場合に、何か、こうフレームっていうか、見方というものがあってということが非常に重要だと思うんですね。特に学校経営研究会という非常に同質性の強い集団なのだから。マスターレベルでもそうだし、学部レベルでも、その授業をどういうふうにしていけば、わかってもらえるかといふかね、そのためにはどういう柱が必要なのかといふか、そんなものやってみたいなあ、なんて思っている部分もあるのですが、そういったものをこの研究会として作っていくっていうね、勉強会とそういうものをかたちに残していくという。これは学校経営研究の紀要の充実にもなるし、また別なかたちで単行本としていけば、研究会のエネルギーとしてもなるし。そのようなことを考えながらちょっと聞いておりました。

天笠：では、この辺でお開きにしたいと思います。みなさんありがとうございました。

(1999年12月25日、於：京都教育大学、記録者 加藤 崇英)